

随  
想  
歌

中  
野  
與  
一

随想歌 目次

序歌

生い立ち

狐

九くさん婆うさん

ポツンと一軒家

四季のうた

アホなわたし

## 序歌

令和七年 春来れば

百年生きた 歳になる

三つの時代 乗り越えて

過ぎた想出 数知れず

後期高齢 通り越し

零が二つの 歳となりや

すっかり忘れる 身の廻り

あなたの名前 何んでした

身近なことは 忘れても

少年時代は はつきりと

昨日のような 出来事に

絵を書くように 覚えてる

## 生い立ち

やまが  
山家の里の 一軒家

きょうだい  
八人姉 末っ子で

母が四十を 過ぎた頃

ひよっこり生まれた余り子

おやじ  
親父はボクに 無関心

母は私を 可愛がり

添寝をしては 子守唄

狐の話も してくれた

我が家は 人の集う家

いつも賑やか 人盛り

田植終わった 農閑期

大勢の人が 集まった

隣近所の 老人は

うちわ片手に 酒持って

うわさ話に 花が咲く

狐の話で 大騒ぎ

## 狐

隣の若者 房夫ふうやんが  
十五の歳とせに 粉河こながわまで  
丁稚奉公ていぢほうこうに 行きました

夏のお盆に 暇ひまもろて  
土産もらった 帰り道

夜の夜中の 更ふけた頃

自転車こ漕いで 走ったが

道に迷って 山の中

あわてふためき 道探し

どうにか家に たどり着く

阿父おとはん阿母おかはん 待っていた



房夫ふうやん 自転車荷台から  
布団にくるんだ 土産物  
急いで中を あけたなら  
鮎箱すつかり 抜けていた

添寝おんの阿母おはん 言いました

昨夜ゆんべ狐こが 啼ないたつて

東あづまの空そらで コンと啼なき

そのあと啼なくとき 西にしの空そら

狐こが飛とぶよに 早はや走り

山の麓の 一軒家

安さん<sup>やっ</sup>母子<sup>おやこ</sup>が 住んでいた

ある晩<sup>やっ</sup>安さん 家<sup>うち</sup>にきて

昨夜<sup>ゆうべ</sup>我が家<sup>や</sup>に 帰るとき

狐とひよっこり 会ったとき

安さん<sup>やっ</sup>とこの 山の奥

稲荷神社が ありました

村に不幸が あったとき

狐の好物 稻荷鮓

そつと供えて おきました

親父は麦畑 行つたとき

畑の畝うねの間には

土がこんもり 盛っていた

土を起こすと その中に

死んだ鶏にわとり 埋めていた

\*狐は獲物をとると、先に血を吸い取って肉は埋めておく。

にわとり  
鶏見つけた 前の晩

よっ  
芳さんよこの 鶏小屋の

網を破って 開けた穴

一番大きな 白い鶏とり

居なくなつたと 大騒ぎ

時代は昭和の 始め頃

怪しい話が ありました

眉つばものも ありました

それでも世の中 穏やかで

話が盡きぬ 夕涼み

## 九さん婆さん

安さんやっとこの 母親は  
九さんくっ婆ばあと 呼ばれてた  
八十、九十の しわくちやで

小さく縮んで 背が低く

いつも腰巻 巻いていて

短い襦袢じゆばんに 草履ぞうりばき

或る日ボクらは 花摘みに

山のふもとに 出かけたら

婆さんボクらを 呼び止めて

お前まへらチョット 寄よっていけ

茱萸くみが仰山ぎょうさん 生なっている

濃わしは小便 かけたから

婆さん家に 去いんでから

ボクらはそつと 近付いて

婆さん来ないか 確かめて

根本の臭い 嗅いでから

高い木の枝 引き寄せて

稔みのった茱萸ぐみを 頬張ほった

安やっさん五十を 過あぎてから

嫁はんもらおと 探したが

誰も来る人 おらなんだ

嫁の替わりに 猫飼って

猫の子だんだん 増えていく

婆さん困って ぼやいてた

婆さん猫の子 持て余し

或る日安やっさん 留守の間に

生れた子猫を かごに入れ

運んだ先は 用水池

どぶんと捨てて 知らん顔



「安」に知れたら 怒られる

二日留守した 安やっさんは

家に戻れば 猫の子の

数が足らんと 気がついた

婆ばばに聞いても 知らん顔

安やっさん怒って 問い詰めて

とうとう婆さん 白状した

噂を聞いた ボクの母

肴土産に 訪ねたら

せんべい布団に くるまつて

からだ痛いと 細い声

わけを聞いたら 泣きながら

「安」がなぐつた 言うたそな

## ポツンと一軒家

私の生れた 村落は

十数軒の 過疎の村

そこから未だ未だ 山奥の

雑木林に 一軒家

夫婦息子の 三人が

ひっそり暮して おりました

親父は房かさんと いう名前

昔道楽した 因果

足は弱くて 耳つんぼ

嫁はんしつかり 気丈夫で

息子の喜一は 馬鹿でした

学校行かずに 知恵遅れ

一尺余りの 細道で

山谷越えの 凸凹を

両手に杖を つきながら

房んはちよくちよく やつてきた

村の情報はなしを 知りたくて  
親父は大声 出していた

知恵の遅れた 喜一には

嫁はん探しで 困つてた

やっともらつた 嫁はんは

似たもの同士の 物知らず

やがて生れた 一人っ子

これ又大変 阿呆息子

勝気でしつかり 婆さんは

思い余って 孫連れて

どんと飛び込む 川の中

二人は暫く 流れたが

溺れる息子の 泣き声に

お父はあわてて 救い出す

私は成人 なった頃

房ん夫婦は いなくなる

息子の嫁も 短命で

残った喜一と その息子

民生委員が 引きとって

施設に入居 したそうな

\*人物は実名ですが類系者はおらず、もはや遠い昔のことです。

## 四季のうた

一月睦月むつきの 寒い頃

北風ピューと ふいてきて

雪がこんこん 降る冬は

トンボのヤゴは 水のなか

春がくるまで 待ってます

二月如月きさらぎ 春ちかい

冬の寒さに 黄の蝶は



ひなたの花を さがしてた  
そんなにせわしく 働くな  
虫たち縮んで 土のなか

三月弥生やよいに なったころ

三月五日の 虫の日に

土をかきわけ はい出して

モンシロ蝶は 出てきたよ

土筆つくしもひよっこり 顔出した

四月卯月うづきの ぬくい日に

たんぽぽ花を 咲かせたよ

すみれもあわてて 顔出して

負けるもんかと 化粧して

晴着はれぎきかざり みておくれ

五月皐月さつきの 咲くころに

ぬるんだ水の 田のなかで

生れた蛙の 赤ちゃんは

くるくる廻って しっぽだし

目玉むきだし　コンニチハ

六月水無月みなづき　なつたなら

雨がポツポツ　降つてきて

田んぼに　水がたまつたよ

蛙がぎゃあぎゃあ　鳴きだして

田植えをせよと　せかせてる

七月文月かづきに　ふみ出した

田植えようやく　終わつたと

田んぼの稲の あいだから  
トンボのヤゴが はい上がり  
からをやぶって とびだした

八月葉月はつきの 暑いころ  
七年かけて 眠ってた

蝉が土から はい出して  
ようやく大人に なりました  
があがあ歌を うたってる

九月長月 ながつき お月さま

すすきが風に ゆらぐころ

赤衣着物の まんじゅさげ

アゲハが長い 口のばし

みつをさがして 飛びまわる

十月 神さまいない月

ヒグラシ早よから 鳴きだして

カナカナカナと 言っている

神さま早く もどつてと

ワタシはもうすぐ  
いなくなる

十一月の 霜月しもつきは

お日さまいそいで 山の中

夜中にコオロギ さびしくて

ギイギイギイト ギターひく

みなさんぐつすり 眠ってね

十二月しわす師走の おしまいは

テントウ虫が あつまって

あたたかそうな こものなか

カマキリ卵は 木の枝で

夢をみながら 眠ります

## アホなわたし

ボクってほんまに アホやろか

いつもくよくよ 悩んでる

チョット嬉しい ことあれば

心うきうき 有頂天

ころころ廻る コマのよう

ボクってほんまに アホやろか

もうすぐ百が くる歳に

子供のような夢をみる

彼奴あいつが いじめた 思い出が

いつか笑顔に かわつてた



ボクってほんまに アホやろか

一年生に なってから

阿母おんのおっかぱい さわつてた

おやじはいつも きつかった

妬やけていたんか 阿父おっとうは

ボクってほんまに アホやろか

八人兄姉きょうだい 末っ子で

いつも兄貴に いじめられ

部屋の隅コで 泣いてたら

あとで飴玉 くれていた

ボクはほんまに アホやろか

兄貴は学校で 優等生

ボクは学校で 劣等生

ヨイチはいつも あかんだれ

兄貴はいつも 笑ってた

ボクはほんまに アホやろか

ヨイチと名前 つけられて

何処どこでもヨイチと 呼ばれてた

那須与一なすのよいちの名に 似てる

からかいながら 呼ばれてた

ボクはほんまに アホやろか

極寒の地 シベリアで

寒さにふるえ 三年半みとせ

死んだ戦友 放つはなつといて

生きて戻った 舞鶴まいづるへ

ボクってほんまに アホやるか

死んだ嫁はん ほっといて

いつ迄生きて いるんやろ

それでも毎日 楽しくて

こうしてここで 生きてます

やっぱり私は アホなんや！